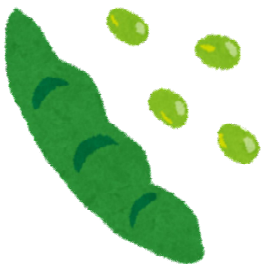


つがるの昔っこ (昔話) ①

豆っ子三太郎

(標準語Ver.)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所

イラスト : やざわ ゆな

カラーリング : つしま けいこ

昔、ある村に、三太郎という子供がいました。体は小さくて、力も弱いので、いつもみんなに「豆っ子 三太、豆っ子 三太。」とばかにされ泣いていました。

三太郎のお父さんはそれを気にして、何とか一人前の男に育てたいと思っていましたが、三太郎が10歳になった時、お父さんは病気にかかって死んでしまいました。

その時、お父さんは息子を枕元に呼んで、苦しい息の下から繰り返し、繰り返し言い聞かせました。



「三太郎、お前は体も小さいし、力も弱くて いつもみんなからいじめられているけれども、そのようなことで落ち込んで駄目（だめ）だよ。人間が一番大事なことは、優しい気持ちを持っていることと、勇気があることだ。俺は今お前に、いいものをあげるから、これをいつもどんな時も離さないで持っていなさい。何か困ったことがあったら これをにぎって、「お父さん、お父さん」と俺を呼びなさい。私はあの世から必ずお前に勇気を与えてやるから、決して気落ちしてはいけないよ。」とお守りを三太郎に渡してお父さんは死んでしまいました。

三太郎は悲しくて悲しくて、遊ぶこともご飯を食べることも忘れて、毎日毎日泣いて暮らしました。そして、七七（しちしち）四十九日がたった日のことです。三太郎はふと、お父さんが渡してくれたお守りのことを思い出しました。お守りをぎゅっとにぎって、お父さんが言った通りに、目をつぶってお父さんの名前を呼んでみました。そうしたら不思議なことに、三太郎の悲しい気持ちがだんだんと消えていって、心の奥から何か勇気がわいてくるようでした。



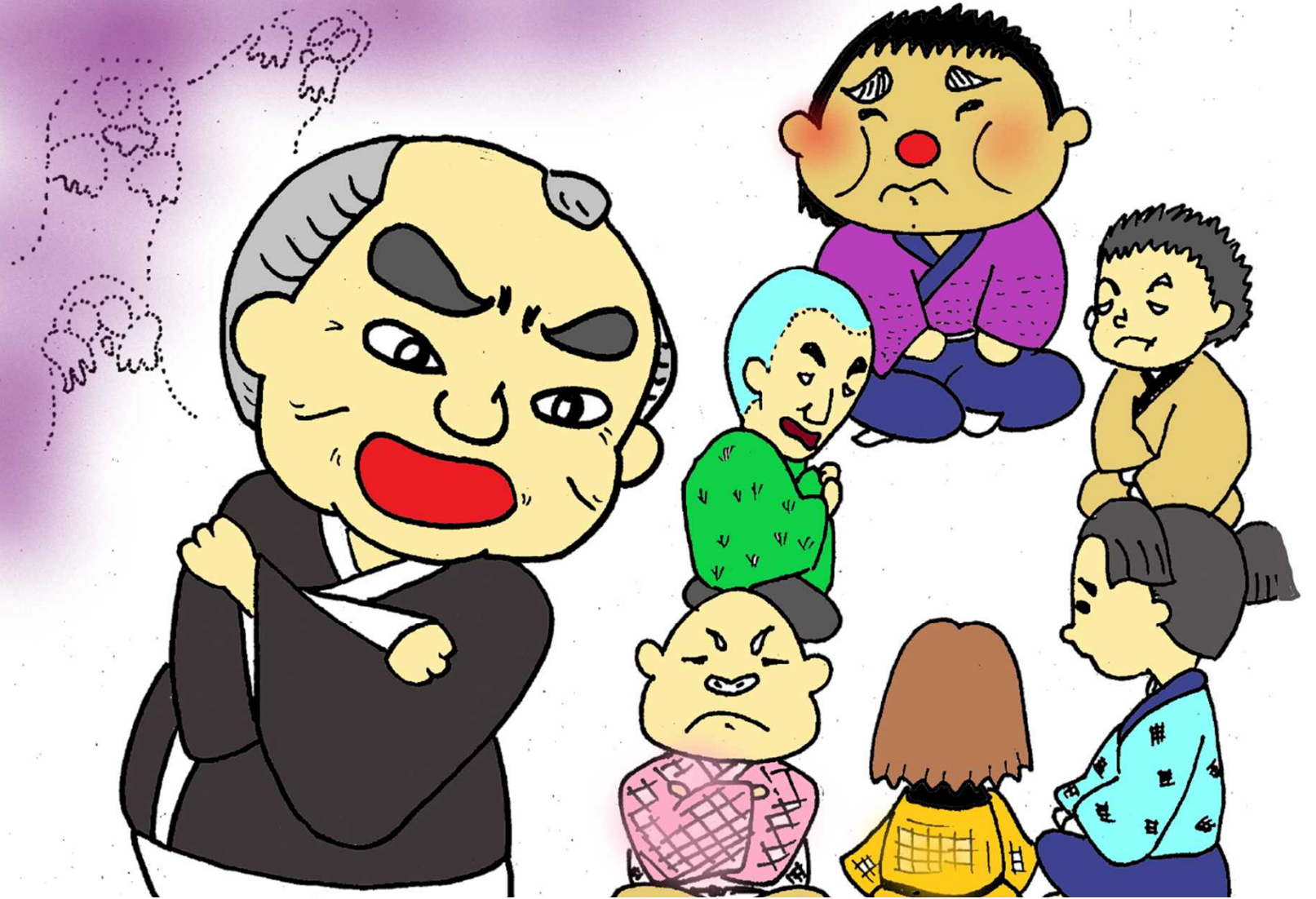
「そうだ。こうしてられない。元気を出さないといけない。」と、それからまだ10歳の三太郎はお母さんを助けて、一生懸命に働きました。ほかの子供たちに、また「豆っ子 三太、豆っ子 三太」とからかわれても、三太郎は相手にしないで、

苦しい時、辛い時は必ずお守りをにぎって、「お父さん、お父さん」と呼びました。生きてそばに居ないのは悲しいけれど、その代わりに、お父さんはいつでも僕を見てくれていると思えば、不思議と元気が出てきました。

三太郎が15歳になったときです。その頃の15歳と
言えば、もう1人前の大人です。近頃、村はずれに
化け物がでるといふ噂が流れました。何でも、化け
物は夜が更けてから村の西を流れている川の橋のあ
たりに出て、「わ～ 重いな～ 手伝って欲しいな～
～。わ～ 重いな～ 手伝って欲しいな～。」と苦
しそうに叫ぶそうです。噂（うわさ）がどんどん大
きくなってきました。



村の名主の千兵衛は、「これは放っておけないな。」
とある日、村の男達を集めて相談しました。



みんなで色々話しましたが、どうも話があやふやで、意見がまとまりませんでした。そこで、今度は千兵衛が、「みんな、いいか。化け物化け物と言うけれど、これは一つ、その化け物というものがどういう化け物なのか、しっかりと確かめてみないといけないな。怖いと思って見ると、枯れ木も幽霊（ゆうれい）に見えるし、風の音も人の声に聞こえる。これはまず、その化け物の正体を確かめてみよう。と言って、「誰かその化け物の正体を確かめに行く奴はいないか？」

「う～ん、そうだ、こら、ごん助、お前が行ってこい」「お、俺が?!」ごん助は村一番の力持ちで、回りの村との相撲大会で優勝し、この辺りの素人相撲（しろうとずもう）の横綱だと言われて普段なら威張って歩いている男です。「そうだ。お前は日頃からこの近くの村々でおれにかなう奴はいない、と言って歩いている男だろ？ そうだ、お前しかいない。お前行ってこい。」ごん助は力は強いが、本当は気が小さい意気地（いきじ）のない男でした。しかし、日頃から力自慢を鼻にかけているので、今さら「ううん」と言えませんでした。「それじゃ、行ってこようかな」と言って出かけて行きました。

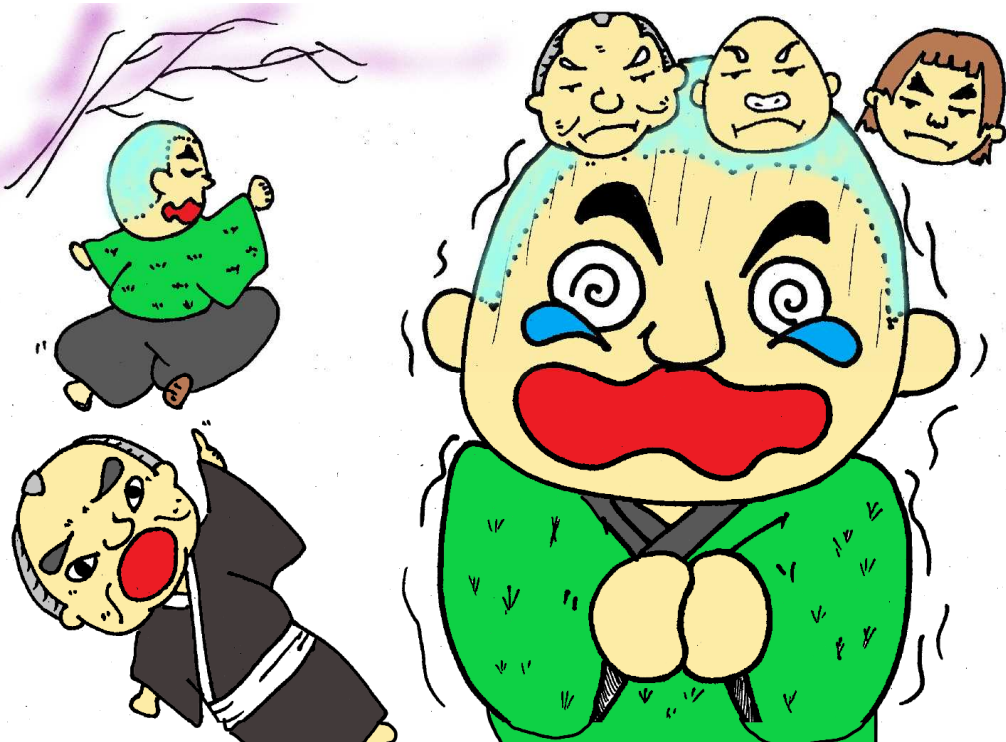
だいぶ時間が経ってから戻ってきたので、みんなはごん助のそばに寄って「それで？ どうだった？ 化け物の正体はどんなものだった？」と聞きました。ごん助は、「俺は川の脇で、しばらくの間待っていたけれど、蛙がゲロゲロと鳴いているだけで何も出てこなかったの、ひとまず戻ってきたんだよ。まあ、時間が少し早すぎたのかな。それとも、俺に恐れを感じて化け物の奴は出てこなかったのかもしれないな。ははははははは。」と言いました。

千兵衛は、「そうだなあ。それなら、もっと夜更けになってからもう一回行ってこい。」「え?! 夜中にもう一回!?! あ、いたたたたたた。おれ、何だか急にお腹（おなか）の具合が悪くなってきたな。ちょ、ちょっと家に戻って、薬を飲んでくるよ。」と言って、こそこそと出て行ってしまいましたが、今度はいくら待っても戻ってきませんでした。

千兵衛は、「度胸（どきょう）のない奴だな。急に腹が痛くなったって、あれは仮病（けびょう）だな。意気地がないな。」



「それじゃ、長作、今度はお前が行ってこい。お前はいつも足が速いのを自慢していただろ？橋のそばまで行って、よ〜く化け物を確かめてこい。」 さあ、次に早足自慢の長作が見に行きました。そうしたら、今度はどんなに時間が経っても戻ってきません。「あれ？遅いな。何かあったんじゃないか？もしかして、化け物に食べられたんじゃないのか？」とみんなも不安になってきました。そうすると、そこに、ぶるぶるぶると震えて真っ青になり、目も何もかもぐるっとひっくり返るような顔をした長作が、息を切らせて戻ってきました。

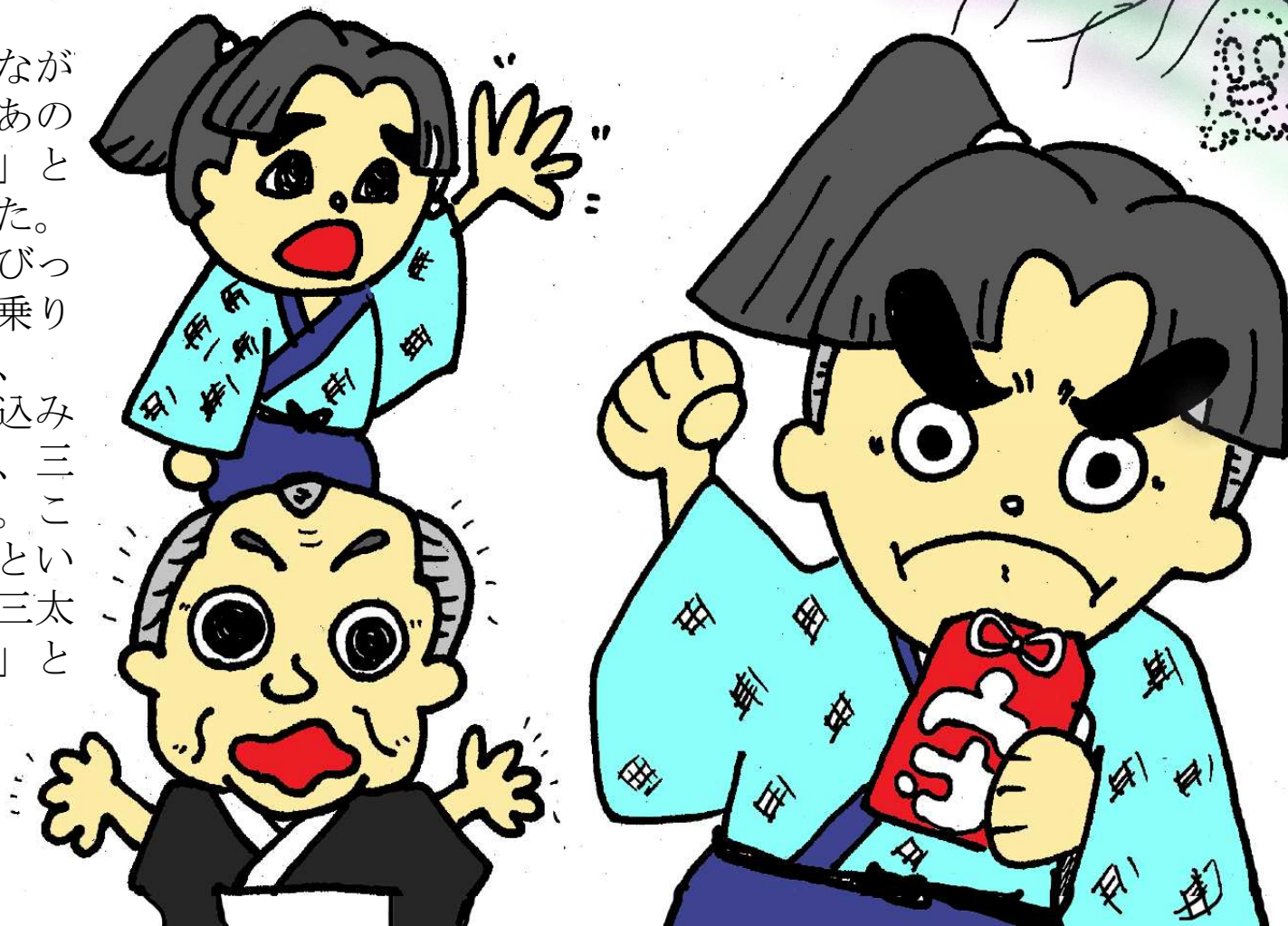


よほど恐ろしい目に遭ったのか、声までもわなわなわなと震えて、「で出で、出た一。ま、間違いなく化け物だ。」と言って、「あれは聞いた者じゃないと分からない。あの恐ろしい声、あ〜重いな〜手伝って欲しいな〜と、まるで地獄（じごく）から聞こえてくるような声だ。はあ〜いやいやいや、俺はあれを聞いたら体中の血が逆さまに流れて、心臓が凍ってしまいそうな気持ちだった。」「それで、お前は化け物を見たのか？」「いや、俺はその声を聞いただけで、怖くて、怖くて、とてもそばまで行く度胸が無かった。俺は一目散に走って逃げてきたよ。」さあ、それを聞いた千兵衛も、村の男たちもシ〜ンとなってしまって、しばらくは誰も口をきく者はいませんでした。

しかし、化け物がいると分かって、このままにしておくわけにもいきません。もしも、女や子供に悪さをしたら大変なことになります。

「おい、誰か、その化け物の正体を見極めてくる者はいないか？」と言っても、もう今度は誰も、「俺が行く。」「俺が見てくる。」と言う者はいませんでした。「大五郎、どうだ？金太、お前はどうか？弥吉はどうか？」と聞いても、みんなは顔を青くして下を向いて返すこともしませんでした。そうしたら、部屋の隅のほうから、一人の声が上がりました。

「俺が行ってくる。」みんなが動転して見たところ、それはあのみんなから「豆っ子 豆っ子」とバカにされている三太郎でした。それを見た千兵衛も、内心はびっくりしましたが、他に誰も名乗り出る者はいませんでしたので、「よし、よく言った。誰も尻込みをして行くやつがないのに、三太郎、お前はよく名乗り出た。こうした時に見せる、男の根性というものは本当の根性だよな。三太郎頑張って行ってきてくれ。」と励ましました。



三太郎は、ずーっと歩いて行きました。だんだんと、化け物がでるといふ場所に近づいてきました。川のところまで行ったら、闇の中から「わ～ 重いな～ 手伝って欲しいな～。わ～ 重いな～ 手伝って欲しいな～。」という声が聞こえてきました。「化け物だ!!!」

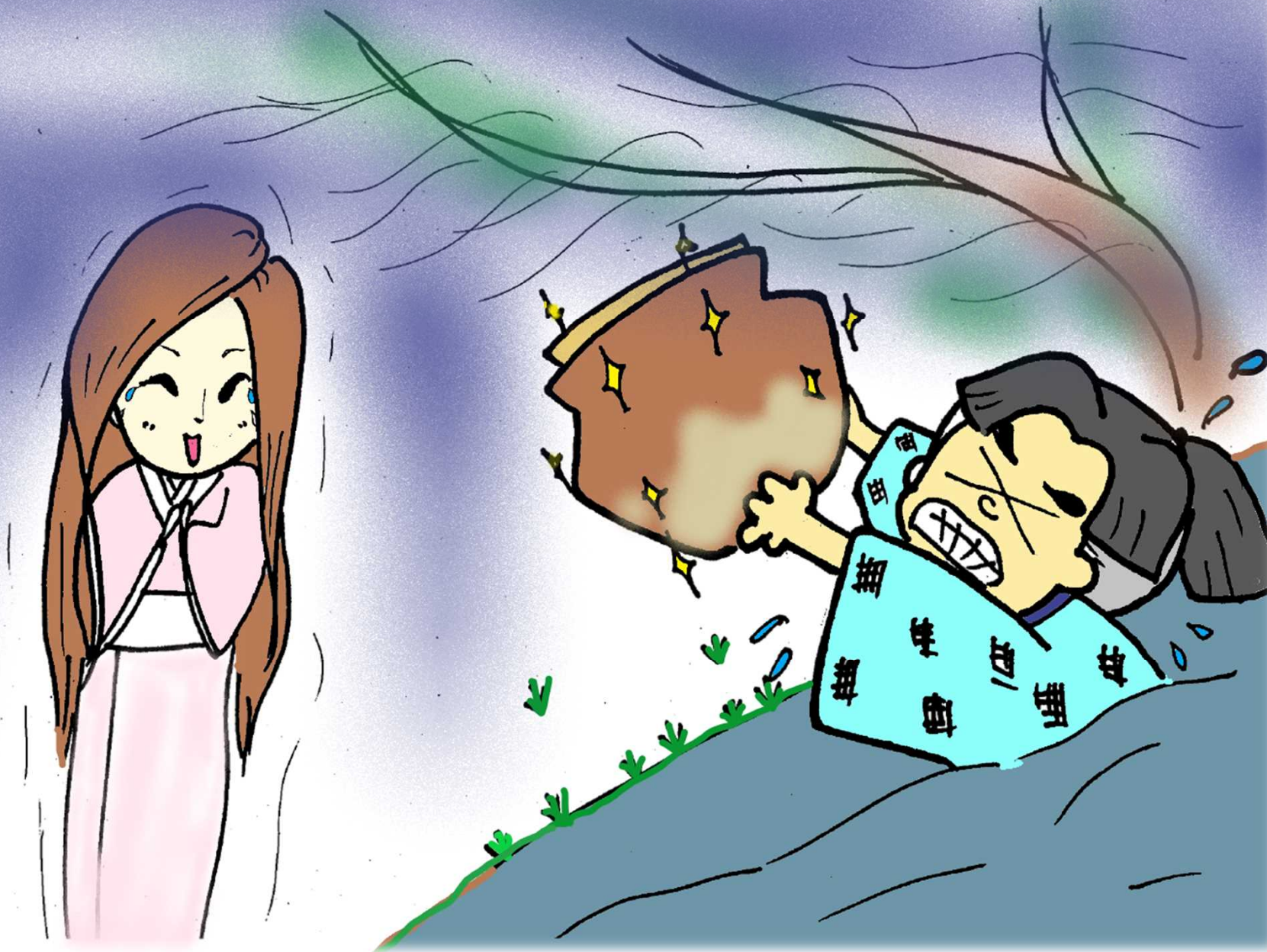
三太郎は、頭から水をかぶったように、全身がぶるぶるぶると震えてしまいました。しかし、ここで負けてはいられないと思い、懐からお父さんのお守りを出してぎっちりにとぎって「お父さん、お父さん」と心の中で呼びました。そうしたら、気持ちがスーッと落ち着いてきました。声をした方をしばらくの間黙って見ていたら、目も闇に慣れてきました。

そうしたら、そこに綺麗（きれい）な若い娘が立っていました。三太郎はごくりとつばを飲んで、「あなたは、だ、誰ですか？」と聞きました。

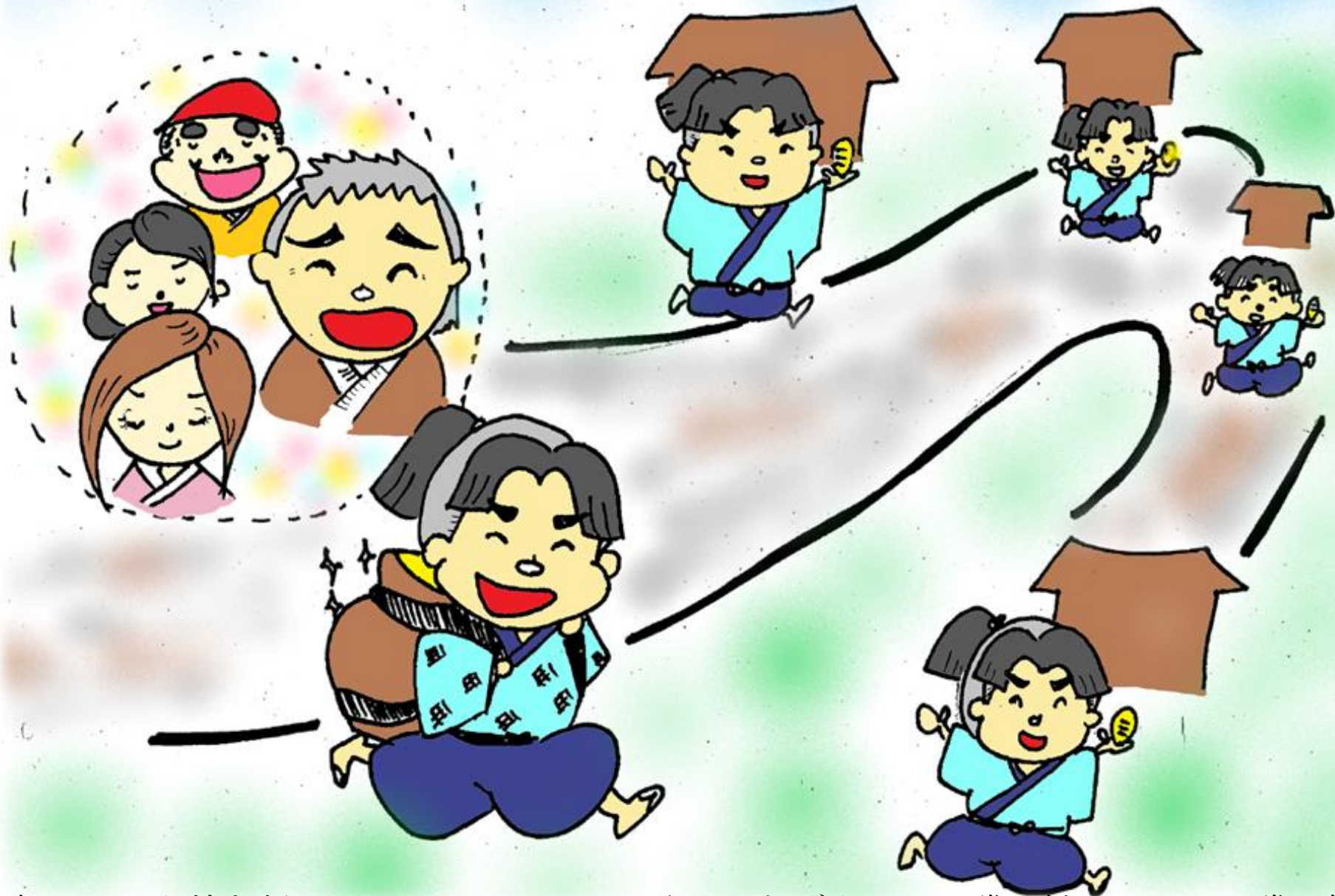


その娘はこちらを向いて、「私はこの川の上の方の町の商人の娘ですが、昨年、両親と一緒に舟に乗っているところに、大波が来て舟と一緒に沈んでしまいました。この瓶の中には、お父さんとお母さんが商売で、一生懸命貯めたお金が入っています。お父さんもお母さんも私も死んでしまいましたが、このお金は誰かに拾ってもらい、世の中のために役立ててもらおうと、三途の川（さんずのかわ）を渡る前に相談しました。そこで、私が毎晩ここに来て、この瓶を底から持ち上げてくれる人を探していたのです。私は娘だし、この通りこの世のものではないので、この重い瓶を持ち上げることができなくて、毎晩手伝ってほしい、手伝ってほしいと叫んでいたのです。

三太郎はそれを聞いて、川に入って底から瓶を持ち上げて陸に上げました。それを見た娘はにっこりと笑って、「これで私もお父さんとお母さんが待っている三途の川の川原に行くことができます。」と言って、スーっと消えてしまいました。



三太郎はその瓶の蓋を開けてみたところ、瓶の中には小判がぎっしりと入っていました。三太郎は動転しましたが、それから落ち着いてよく考えました。このような大金が手に入ったのも、死んだお父さんのおかげだ。お父さんが死ぬとき、人間が一番大事なのは勇気を持つことと、優しい心を持つことだと言っていた。こんな大金を、一人で勝手に使うと罰が当たる。あの娘さんも、世の中のために役立ててと言っていた。」



三太郎はそれを持ち帰って、困っている人に分けてあげました。隣の村にも、その隣の村にも、困っている人たちみんなに分けてあげました。豆っ子 三太と馬鹿にしていた人たちもみんな後悔して、それから三太郎は情けの三太さまと呼ばれて、みんなから尊敬されました。

みんなも、この三太のお父さんの教えをいつも思い出して、自分には勇気、人には優しい心を持たないと駄目（だめ）だよ。